

6・16(水) 市民の意見30の会・東京 講演会

《予定》

資料費で800円(予定)



*2: ご注意・鶴見俊輔さんは現在の予定で、健康の状況によっては、鶴見さんのDVD記録の一部の映像と、古川勇一さんの「鶴見俊輔さんの『小田実組織論』について」の講演に変わる可能性があります。

主催：市民の意見30の会・東京

東京都渋谷区千駄ヶ谷4-29-12-305 電話&FAX：03-3423-0185

池澤夏樹著『カデナ』(新潮社¥1995)書評

68年4人のひと夏 重い題材軽やかに

[評者]鴻巣友季子(翻訳家)

ここ数年、池澤氏が個人編集を行ってきた世界文学全集には、母国・母語を離れて書く越境作家が多く選ばれ、旧来の西洋古典とは違うコンセプトで話題だが、本書でも描かれるのは、人種、文化、国のボーダーにある土地と、複雑なルーツを抱えた「移動する人々」である。

1968年。ベトナム反戦の嵐が吹き荒れ、日本の「内地」が学園紛争真ただ中のこの頃、沖縄ではハノイへむかう米軍機が嘉手納基地から続々と飛び立っていた——68年のひと夏を語るのは3人の語り手だ。アメリカ将校の父とフィリピン人の母をもつ米空軍曹長のフリーダ＝ジェイン。沖縄からサイパンに移住し捕虜の体験を経て、嘉手納で模型と無線の店を営む朝栄。内地に渡った父に捨てられ母を自殺で失ったドラマターのタカ。彼らはベトナム人の安南が計画したスパイ活動に加わり、たった4人で米軍の北爆計画を挫(くじ)こうとする。これだけ重い題材でありながら、本作が軽やかな空気と、「スタンド・バイ・ミー」を思わせる甘酸っぱい切なさを湛(た)えていることに、まず驚いた。

主人公たちはそれぞれ恋人や友人や家族を裏切り、命がけで空爆の情報を北へ流す。彼らはなぜそんな危険な任務を無償で行うのか。私怨(しえん)、恩義、愛国心、アジアの連帯? そんな大仰な熟語で表せるものではなさそうだ。ある者は「おもしろそうだから」と言い、ある者は戦場で見た死体が「背中を押した」と言う。そして4人はみんな少し照れている。「軍事機密を盗みだし国を救う」という英雄的な行為に。この、照れるという心の働きに、私はいたく興味を引かれた。本書に出てくる運動家たちは「一致団結して」「使命をはたす」ような精神から

距離をとろうとする。自分たちの活動を「英雄ぐわーしー(英雄ごっこ)」だと笑う。安南の台詞(せりふ)が心に残る。「愛国心は感情としてどこか気恥ずかしいものかどうかということです。……どこかに無理がある。そのくせ生命が掛かっている。……嘘(うそ)が混じっているの

にそれは言うてはいけないうことになる。だから劣等なのです」。全体主義が我をなくす処(ところ)に発するなら、照れは我に返って自分を顧みることから生じる。「照れる」は個人の始まりなのだ。

彼らの健全な感覚には、出自が関係しているかもしれない。朝栄はサイパンで米兵に拾われたとき、自分はうちなーんちゅ(沖縄人)で日本人でサイパン人なのだから、日本人というアイデンティティーだけに拘(こだわ)る必要はないと考えて自決をやめた。本書に描かれる彼らは、ルーツの分裂や複雑さをむしろ生気の源としている。そこがまた、すがすがしい読後感を残す。

空には飛ぶことと見おろすことの自由しかない、土地に降りて初めて生きる苦労が始まる、とフリーダは言う。異邦人たちの強(したた)かな「ぐわーしー」に、嘘っぽいヒロイズムという爆弾は信管を抜かれ、人々は地を踏みしめて歩く。ゆっくりと。

いけざわ・なつき 45年生まれ。作家。「スティル・ライフ」(中公文庫¥47)で芥川賞、『マシマス・ギリの失脚』(新潮文庫¥820)で谷崎賞、『花を運ぶ妹』(文春文庫¥800)で毎日出版文化賞、『パレオマニア』(集英社文庫¥900)で桑原武夫学芸賞など。

(『朝日新聞』2009年12月6日書評欄から)

